

## 大学生の大学適応に関する研究

松 井 洋\*・中 村 真\*\*・田 中 裕\*\*\*

## A Study on University Adjustment

Hiroshi MATSUI, Shin NAKAMURA, Yuu TANAKA

## 要 旨

日本の若者の問題についての研究の一環として、大学生の大学適応および、その規定因について検討することを目的に調査を行なった。

方法は、大学において大学適応や、入学目的、個人特性などについての質問紙調査を行い検討した。

対象者は東京近郊大学生女子 184 名であった。

大学適応に関する質問項目 50 項目を、因子分析によって 9 因子に整理して分析した。この因子を中心に、いくつかの変数を組み合わせて、不適応を説明する要因について重回帰分析を行った。

その結果、大学生の大学への適応は、まず、大学入学前の態度である大学入学に対する態度に影響される。つまり、はっきりとした目的を持って入学することが、大学適応の第一の要因であると言える。大学生の大学適応の問題の原因は、まずは対象者の元々の学力や勉強に対する態度に大きく影響されているようだ。

さらに、入学後の要因としては、まず友人関係が重要であり、次いで、授業理解や授業満足に関係するような態度で説明される。このように大学生の大学適応は大学入学前と後、そして学生本人の問題と大学の問題など複合的要因によって説明される。

今後は、これらの要因間の関係と不適応が生じる原因についての検討が必要であると思われる。

キーワード：大学適応，大学生，退学，入学目的

---

\*教授 社会心理学

\*\*准教授 社会心理学

\*\*\*准教授 生理心理学

## 問題

日本の若者が、学校や職場に適應できないことをきっかけに、引きこもりやニートなどのような形で社会的な不適應に陥ることが、一般にも問題視されるようになってかなりの時間がたっている。このような学校や職場への不適應が起こる背後には、わが国の景気の後退や、グローバル化などによる産業構造の変化などの、社会の変化の問題がある。

他方、著者らは日本の若者の価値観、道德意識などの日本の若者の問題を長年研究してきた（堀内他 2004, 2005, 2008, 松井 1991, 1997, 1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 2008, 松井他 1995, 1998, 2004, 2005, 2006, 2008 永房他 2004, 中村他 2004, 2008, 中里他 1992, 1993, 1996, 1997, 1999, 2003, 2007）。そして、若者の側のこのような生き方などの問題も、様々な不適應の原因となっているということは、これまでのわれわれの研究からも想像に難くないであろう。

若者の問題は、この外的状況と若者の内面的問題の両方によって説明される。そして、外的状況も内面的問題も時間とともに変わるものであり、それゆえ、若者の問題とそれを説明する要因は日々新たである。

われわれは、これまで中高生の問題を中心に研究してきた。しかし、大学生に問題がないと考えているわけではない。たとえば、松井他（1992）では、若者の問題のうち、大学生の学校適應や授業適應について検討している。そこでは、問題の原因を大学の状況要因と大学生の内面的問題から分析を行なっている。

ところで、この分析から 20 年ちかく経過した今、当然、大学生の大学適應の問題の特徴もその原因も変化していると思われる。そこで、あらためて大学生の大学適應の問題について検討することにした。本研究はその第一歩となるパイロットスタディである。

## 方法

### 1. 調査対象者

調査対象者は、東京近郊大学生女子 184 名であった。

### 2. 実施時期

2009 年 6 月に一般教育の複数の授業中に調査を行った。

### 3. 調査項目

調査内容は、大学適応、勉学に対する態度、個人特性について 50 項目であった。項目の内容については表 2 示している。回答は「あてはまる」から「あてはまらない」までの 4 件法で回答させた。これらの他にも大学入学動機などについて 6 項目について質問を行った。

## 結果

### 1. 大学適応の因子分析

大学適応、勉学に対する態度、個人特性についての 50 項目について因子分析を行った。方法は、最尤法、プロマックス回転である。

その結果、表 1 のように 8 因子の単純構造を得た。また、各因子毎に内的整合性を確認するために信頼性係数  $\alpha$  を算出したところ、全て 0.6 以上の値を示し、概ね良好な整合性を得たと言える。

なお、第 1 因子のなかには、大学適応一般についての項目と、勉強に関する項目の両方が混在する。因子構造としては問題はないが、大学適応の要因を分析する上ではやや因子の意味に濁りがあるとも言えよう。そこで、因子の内容を単純化するために、この第 1 因子を同じ手法の因子分析で検討してみた。その結果、表 2 の 2 因子となった。当然因子間相関は高いが意味のある 2 因子に分解した。そこで、以下は全体を 9 因子として分析していく。

各因子の項目と負荷量から、表 1 の第 1 因子をあらためて分析した因子のうち表 2 の第 1 因子を「大学満足」の因子とした。また、第 2 因子を「授業満足」の因子とした。さらに、表 1 の第 2 因子を「友人関係」の因子、第 3 因子を「個人特性」の因子、第 4 因子を「授業理解」の因子、第 5 因子を「相談要求」の因子、第 6 因子を「大学不適応」の因子、第 7 因子を「入学目的」の因子、第 8 因子を「勉強意欲」の因子とした。

表1 大学生活に関する項目の因子分析結果

	因子							
	1	2	3	4	5	6	7	8
大学の勉強に満足	.903							
大学の授業は楽しい	.702							
大学生活に満足	.652							
大学の授業内容に興味がある	.633							
だいたい授業はわかりやすい	.623							
この大学に入って正解	.584							
大学に好感の持てる教員がいる	.578							
大学の先生は自分のことを考えてくれている	.562							
大学にくるのが楽しい	.534							
入学前から大学の勉強に期待	.473							
この学科に入って正解	.428							
友人と過ごすことが楽しい		.892						
友人関係に満足		.792						
休みや昼食時間は楽しい		.756						
大学に仲の良い友人		.732						
友人と過ごすことがわずらわしい		-.666						
相談にのってくれる友人がいる		.658						
いろいろなことに自信がある			.673					
自分の人生に希望を持っている			.615					
いつも明るい気分であることが多い			.510					
人生について考えている			.496					
将来については考えたくない			-.491					
好奇心が強いほう			.474					
高校生活は楽しかった			.442					
大学の勉強についていけない				.770				
授業内容難しい				.723				
大学の授業レベル高すぎる				.681				
相談にのってくれる人がいたら良い					.800			
勉強のことに教えてくれる人がほしい					.790			
進路についてアドバイスしてほしい					.563			
どんな勉強をして良いかわからない					.336			
落ち込む						.579		
授業がある日なのに大学を休みたくなることがある						.460		
大学を卒業できないかもしれない						.415		
疲れを感じる						.385		
大学をやめようと思ったことがある						.335		
なんとなく大学に入学							.850	
はっきりとした目的があって入学							-.704	
もともと勉強好き								.906
以前から勉強得意でない								-.522
勉強が楽しい								.450
高校から勉強する意欲足りない								-.336
固有値	9.712	4.260	3.680	2.735	2.082	1.664	1.513	1.265
寄与率 (%)	20.444	8.212	7.475	4.803	3.611	2.118	2.573	2.337
因子間相関		.365	.254	-.129	-.002	-.216	-.352	.381
			.306	.003	.008	-.320	-.233	-.027
				-.398	-.144	-.107	-.180	.257
					.323	-.051	.128	-.427
						.218	-.007	-.066
							.271	-.014
								-.226
信頼性係数 $\alpha$	.880	.879	.779	.792	.759	.636	.814	.758

表2 第一因子の分解

	因子	
	1	2
大学生活に満足	.889	
この大学に入って正解	.786	
大学にくるのが楽しい	.675	
この学科に入って正解	.633	
大学の勉強に満足	.493	.325
大学の授業は楽しい		.727
だいたいの授業はわかりやすい		.688
大学の授業内容に興味がある		.668
大学に好感の持てる教員がいる		.618
入学前から大学の勉強に期待		.430
大学の先生は自分のことを考えてくれている		.336
固有値	4.569	.628
寄与率 (%)	41.538	5.706
因子間相関		.714
信頼性係数 $\alpha$	.850	.792

## 2. 項目別度数分布

表3は項目別回答の度数分布である。因子別に整理しなおして示した。

「大学満足」と「授業満足」の因子の項目に対する回答は概ね正規分布のように分布し、しかし、やや肯定的な内容の回答が多い。また、質問項目による違いも小さい。

「友人関係」の因子の項目に対する回答は、友人関係が良好という傾向の回答が多い。他方、少数派ではあるが、友人関係に満足できないと考える対象者も20-25%程度はいるようだ。

「個人特性」の因子の項目に対する回答は、「高校生活は楽しかった」、「いつも明るい気分であることが多い」、「好奇心が強いほう」など、適応的傾向と言い得る項目において肯定的な傾向の回答が多い。他方、「いろいろなことに自信がある」では自信がないほうに分布が著しく偏っている。今回の調査の対象者の個人特性の自己認知については、この自信のなさが大きな特徴である。

「授業理解」の因子の項目に対する回答は、概ね良い悪いが均衡しているが、「授業の内容が難しい」という傾向が強い。

「相談要求」の因子の項目に対する回答は、「あてはまる」と回答する傾向が強い。対象者は助言や手助けを求めているようだ。

「大学不適応」の因子の項目に対する回答は、「大学をやめようと思ったことがある」にあてはまるは少ないが「授業がある日なのに大学を休みたくなることがある」は多い。また、「疲れを感じるが多い」や「落ち込むことがよくある」など精神衛生にかかわるような問題傾

表3 質問項目別度数分布表 (NAを除いた%, 合計は100%にならない項目もある)

因子	質問項目	あてはまる	どちらかといえはあてはまる	どちらかといえはあてはまらない	あてはまらない
大学満足	大学の勉強に満足	9.2	29.3	42.9	17.9
	大学生活に満足	13.6	44.6	27.7	13.6
	この大学に入って正解	19.6	47.5	26.6	15.8
	大学にくるのが楽しい	15.8	40.2	26.6	16.8
	この学科に入って正解	31.0	38.6	17.4	12.0
授業満足	大学の授業は楽しい	9.2	38.0	36.4	15.8
	大学の授業内容に興味がある	19.0	44.6	27.2	8.2
	だいたいの授業はわかりやすい	8.2	37.5	40.2	13.0
	大学に好感の持てる教員がいる	27.2	42.9	18.5	9.8
	大学の先生自分のことを考えてくれている	6.0	34.2	43.5	15.2
	入学前から大学の勉強に期待	7.6	33.7	38.6	19.0
友人適応	友人と過ごすことが楽しい	50.0	32.1	9.2	7.1
	友人関係に満足	35.9	37.0	15.8	10.3
	休みや昼食時間は楽しい	47.3	34.8	12.0	5.4
	大学に仲の良い友人	63.6	24.5	7.6	3.8
	友人と過ごすことがわずらわしい*	5.4	11.4	30.4	51.6
	相談にのってくれる友人がいる	41.8	41.3	11.4	4.3
個人特性	いろいろなことに自信がある	2.2	15.2	44.0	37.5
	自分の人生に希望を持っている	14.1	32.6	37.0	15.8
	いつも明るい気分であることが多い	17.9	44.6	27.7	8.7
	人生について考えている	45.1	41.8	10.3	1.6
	将来については考えたくない*	15.8	24.5	36.4	22.3
	好奇心が強いほう	36.4	44.0	16.3	2.7
	高校生活は楽しかった	56.0	26.1	8.2	8.7
授業理解	大学の勉強についていけない	14.7	29.3	39.1	15.8
	授業の内容が難しい	21.2	37.5	31.5	8.2
	大学の授業レベル高すぎると思う	5.4	15.2	52.7	26.1
相談要求	相談にのってくれる友人がいたら良い	25.5	48.4	16.8	8.2
	勉強のことについて教えてくれる人がほしい	34.8	45.7	13.0	4.9
	進路についてアドバイスしてほしい	39.7	41.8	13.0	3.8
大学不適応	落ち込むことがよくある	38.6	32.1	21.2	7.6
	授業がある日なのに大学を休みたくなることがある	47.3	30.4	14.7	6.5
	大学を卒業できないかもしれないと思ったことがある	26.1	21.7	22.3	28.8
	疲れを感じるが多い	47.3	41.3	8.2	2.2
	大学をやめようと思ったことがある	17.4	13.6	16.8	51.1
入学目的	なんとなく大学に入学した	14.7	26.6	28.8	29.3
	はっきりとした目的があって入学した*	29.9	28.8	25.0	15.8
勉強意欲	もともと勉強好き	3.3	18.5	35.3	41.8
	以前から勉強得意でない*	45.7	30.4	18.5	4.9
	勉強が楽しい	3.8	24.5	38.0	33.2
	高校のころから勉強する意欲足りない*	34.8	37.0	22.8	4.3

\*は表1の因子分析の因子負荷量が-の項目

向がみられる。

「入学目的」の因子の項目に対する回答は、どちらかという入学目的を持って入学している傾向があることを示しているが、対象者のうち4割程度はそれが薄弱であるようだ。

「勉強意欲」の因子の項目に対する回答は、もともと勉強が苦手好きではないという傾向が顕著である。

### 3. 退学傾向と関連する要因の分析

退学したいと考える傾向と関連する要因について「大学をやめようと思ったことがある」の質問項目を4件法の中央から2分してやめようという傾向の「あり」と「なし」に対象者を分類して、他の質問項目とのクロス集計を行った。その結果有意な関係( $\chi^2$ 検定(df=3)で5%以下で有意な項目)のあった項目を表4に示した。

表4 大学をやめようの有無と大学生活に関する項目のクロス集計結果( $\chi^2$ 検定(df=3)で5%以下で有意な項目(-)は項目の内容と反対の方向に有意なもの)

将来考えたくない、意欲わかない、人生に希望(-)、大学に仲の良い友人がいる(-)、授業楽しい(-)、友人と過ごすわずらわしい、友人関係に満足(-)、休みや昼食時間は楽しい(-)、大学生活に満足(-)、大学の勉強に満足(-)、大学に来るのが楽しい(-)、この学科に入って正解(-)、この大学に入って正解(-)、はっきりとした目的があって入学した(-)、なんとなく大学に入学、大学に好感の持てる教員がいる(-)、入学前から大学の勉強に期待(-)、大学の授業内容に興味がある(-)、大学に来るのは出席のため、大学を卒業できないかもしれない、大学でどのように過ごしてよいかわからない、大学を休みたくなることがある、
---

「大学をやめようと思ったことがある」の有無と有意な関係がある項目は表4のように22項目ある。それは個人特性から入学目的まで多彩であり、何が退学しようという意思を説明する要因なのか説明することが困難である。

そこで、「大学をやめようと思ったことがある」という質問に対する答えを説明する要因の分析を行った。方法は、「大学をやめようと思ったことがある」の回答を従属変数、上記の大学適応に関する9因子を説明変数とする重回帰分析である。また、「大学不適応」、「授業満足」の因子は従属変数と内容的に重なり、「相談要求」の因子は因果関係から見て退学の説明変数としては不適当と考え説明変数には加えていない。また、得点は因子得点ではなく、因子に含まれる項目合計である。説明因子の投入は強制投入である。

結果は表5のとおりである。 $R^2$ の値が大きいので説明率は高くはない。相対的に見ると、「大学をやめようと思ったことがある」ということを説明するのは、一に入学目的、次いで友

表5 「大学をやめようと思ったことがある」を従属変数とした重回帰分析の結果

	$\beta$	t	有意確率
個人特性	.133	1.490	.138
授業理解	-.010	-.120	.905
入学目的	.319	3.932	.000
勉強意欲	-.104	-1.252	.212
友人関係	-.231	-2.961	.004

 $R^2 = .157$ 

人関係である。他の因子は有意ではない。

表5は説明変数として因子を用いているが、質問項目を説明変数とした場合は表6の結果になった。投入したのは表4で示した「大学をやめようと思ったことがある」と有意な関係があった22項目である。ここでは5%で有意な項目だけ示している。

この分析でも、入学目的の因子に含まれる「なんとなく大学に入学」の $\beta$ が一番大きい、ついで、友人関係に含まれる「友人と過ごすことがわずらわしい」、授業満足 of 因子に含まれる「大学の授業内容に興味がある」「大学の勉強に満足」の項目である。

表6 「大学をやめようと思ったことがある」を従属変数とした重回帰分析の結果

	$\beta$	t	有意確率
友人と過ごすことがわずらわしい	.147	2.171	.031
大学の勉強に満足	-.186	-2.423	.016
なんとなく大学に入学	.208	2.968	.003
大学の授業内容に興味がある	-.190	-2.471	.014

 $R^2 = .225$ 

### 3. 大学不適応傾向と関連する要因の分析

先に構成した因子のうち「大学不適応」の因子を従属変数とした重回帰分析を行った。結果は表7のようになり、授業理解、友人関係、入学目的の順に $\beta$ が大きい。

表8は同じく「大学不適応」の因子を従属変数とするが、説明変数に質問項目を使用した場合の重回帰分析の結果である。5%で有意な項目だけ示している。表のように「友人と過ごすことがわずらわしい」が最も $\beta$ が大きく、これは、因子を用いた分析で言えば友人関係の因子である。ついで「意欲わかない」という個人特性の因子の項目があり、「人生に希望」も同じである。ただ、個人特性の項目については大学不適応だから意欲がないのか、意欲がないから



不適応なのか因果関係の説明は困難である。

表7 大学不適応を従属変数とした重回帰分析の結果

	$\beta$	t	有意確率
個人特性	-.028	-.338	.736
授業理解	.255	3.312	.001
入学目的	.179	2.344	.020
勉強意欲	-.100	-1.285	.201
友人関係	-.231	-3.160	.002

$R^2 = .257$

表8 大学不適応を従属変数とした重回帰分析の結果

	$\beta$	t	有意確率
意欲わかない	.168	2.263	.025
人生に希望	-.146	-1.991	.048
大学の授業は楽しい	-.161	-2.154	.033
友人と過ごすことがわずらわしい	.238	3.453	.001
入学前から大学の勉強に期待	-.124	-1.762	.080

$R^2 = .273$

### 3. 大学満足傾向と関連する要因の分析

次に、不適応や退学というような否定的な側面ではなく、肯定的な側面から見るために「大学満足」の因子を従属変数とする重回帰分析を行った。結果は表9のように、友人関係、入学目的、勉強意欲、授業理解の順に $\beta$ が大きかった。

表10は質問項目を説明変数とした重回帰分析の結果である。ここでも、友人関係、入学目的、授業満足に関わる項目の $\beta$ が大きい。

表9 大学満足を従属変数とした重回帰分析の結果

	$\beta$	t	有意確率
個人特性	-.120	-1.587	.114
授業理解	.140	2.018	.045
入学目的	-.374	-5.429	.000
勉強意欲	.207	2.945	.004
友人関係	.459	6.940	.000

$R^2 = .392$

表 10 大学満足に従属変数とした重回帰分析の結果

	$\beta$	t	有意確率
将来については考えたくない	.106	1.954	.052
意欲わかない	-.103	-1.975	.050
大学の授業は楽しい	.246	3.912	.000
友人関係に満足	.364	7.065	.000
はっきりとした目的があって入学	.258	4.801	.000
入学前から大学の勉強に期待	.116	2.012	.046
大学の授業内容に興味がある	.164	2.437	.016

 $R^2 = .619$ 

### 考察

まず、質問項目の度数分布から対象者の特徴についてまとめてみる。

回答が否定的に偏るのが「いろいろなことに自信がある」で、自信がないほうに分布が著しく偏っている、自信のなさがこの対象者の第一の特徴である。

次いで、「授業がある日なのに大学を休みたくなることがある」、「疲れを感じるが多い」や「落ち込むことがよくある」など精神衛生にかかわるような問題傾向がみられる。

そして、相談要求の因子に含まれる項目ではいろいろと相談を求める傾向が強く。「勉強意欲」の因子の諸項目に対する回答は、もともと勉強が苦手好きではないという傾向が顕著である。

以上のように、この調査の対象者は、自信がないなど精神的にひ弱な傾向があると言えるだろう。もっとも、この傾向は現代の日本青年にかなりの程度見られる傾向ではある。であるから、本調査の結果だけで、この対象者が特別に偏った人々とは言うことは避けたい。

次に、大学への適応についての要因の分析について検討する。ここでは、いくつかの従属変数と説明変数を組み合わせた重回帰分析を行った。

まず、「大学をやめようと思ったことがある」という項目を従属変数とする重回帰分析の結果は、入学目的、次いで友人関係の因子が重要と言う結果であった。因子ではなく項目を説明変数とした場合も「なんとなく大学に入学」や「友人と過ごすことがわずらわしい」など、この二つの因子に関係する項目が重要と言う結果だが、他に、「大学の勉強に満足」や、「大学の授業内容に興味」など、授業にかかわる項目も説明変数として有意であった。これは授業満足の因子に含まれるものであって、この因子は因子全体としての意味が従属変数と重なると思われるので、因子による説明では除いていた。

「大学不適応」の因子を従属変数とした場合は、授業理解、友人関係、入学目的の順に $\beta$ が大きく、説明変数に質問項目を使用した場合「友人と過ごすことがわずらわしい」という、友人関係の因子の項目が最も $\beta$ が大きいが、「意欲わかない」、「人生に希望」という個人特性の因子の項目も続く。

「大学満足」の因子を従属変数とした結果は、友人関係、入学目的、勉強意欲、授業理解の順に $\beta$ が大きく、質問項目を説明変数とした結果も、「友人関係に満足」など友人関係の因子、「はっきりとした目的があって入学」など入学目的、「大学の授業は楽しい」など授業満足に関わる項目の $\beta$ が大きい。

以上のように、いくつかの変数を組み合わせた分析を行った。いろいろ組み合わせた分析は一貫した結果であった。

それは、大学生の大学への適応は、まず、入学前の態度である大学入学に対する態度に影響される。はっきりとした目的を持って入学することが、大学適応の第一であって、はっきりしない気持ちで入学したり、大学の勉強に期待しないで入学することは不適応の原因の第一である。回答の分布から、このような対象者は全体に少なからずいる可能性がある。

入学後の適応の要因は、まず友人関係にある。「友人と過ごすことがわずらわしい」といったことである。このような対象者は全体では多数ではないが無視できない程度にいる可能性がある。

次には、授業理解や授業満足に関係するような態度である。授業満足についてはかかりの対象者が満足を感じているようである。他方、授業が難しいあるいはついていけないという回答も多い。授業内容については概ね満足だが、しかし難度については困難な問題があるようだ。しかし、この問題の原因は対象者の元々の学力や勉強に対する態度に大きく影響されているようだ。現在在学中の大学の授業についての因子である授業理解と入学前からの学習に対する態度についての因子である勉強態度の因子間の相関は $-0.427$ とかなり高いものであるからだ。

以上のように、大学生の大学適応については、大学生自身の勉強への意欲や態度や基礎的学力ということに左右されるところが大きい。もし、適応への支援を考えるのなら、このような状況を考慮する必要があるだろう。

本研究は大学生の大学適応についてのパイロットスタディであって、とりあえず、検討すべき問題が明らかになったと考えている。今後、この結果を基に、要因間の関係などの検討に進む必要があると考えている。

## 文献

- 堀内勝夫, 中里至正, 松井 洋, 中村 真, 永房典之, 鈴木公啓, 2005, 「恥意識の構造」, 日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集.
- 堀内勝夫, 中里至正, 松井 洋, 中村 真, 永房典之, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究(1) —価値観との関係—」, 『日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集』, 526.
- 堀内勝夫, 松井 洋, 中村 真, 中里至正, 2008, 「恥意識と非行的態度に関する研究(1) 恥意識の構造」『日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集』, pp.354-355.
- 松井 洋, 1991, 「青年期における愛他行動の発達とその規定因」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 2 巻 pp.181-193.
- 松井 洋, 1992, 「. 大学生の学校適応と授業 態度に関する研究」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 3 巻 第 2 号, pp.147-165.
- 松井 洋, 中里至正, 加藤義明, 瀬尾直久, 石井隆之, 1995, 「愛他性の構造に関する国際 比較研究」, 『日本心理学会第 59 回大会発表論文集』, 173.
- 松井 洋, 1997, 「愛他性に関する国際比較研究—米国, 中国, 韓国, トルコ, 日本の中学生・高校生を対象として—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 8 巻 第 1 号, pp.107-119.
- 松井 洋, 中里至正, 石井隆之, 1998, 「愛他性の構造に関する国際比較研究」, 『社会心理学研究』, 第 13 巻, 2 号, pp.133-142.
- 松井 洋, 1998, 「中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの愛他性の国際比較研究—」, 『Health Sciences』, vol.14, no.2, pp.45-55, 日本健康科学学会.
- 松井 洋, 1998, 「愛他性に関する国際比較研究Ⅱ—日本, 中国, 韓国, アメリカ, トルコ, キプロス, ポーランドの中学生・高校生を対象として—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 9 巻 第 1 号, pp.175-186.
- 松井 洋, 1999, 「日本の中学生・高校生の価値観に関する研究—日本, アメリカ, 中国, 韓国, トルコ, キプロス, ポーランドとの国際比較研究—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 10 巻, 第 1 号, pp.131-153.
- 松井 洋, 2000, 「日本の若者のどこがへんなのか—中学生・高校生の国際比較から—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 11 巻, 第 1 号, pp.101-114.
- 松井 洋, 中里至正, 石井隆之, 2000, 「中学生の親子の心理的距離」, 『日本心理学会第 64 回大会論文集』, 190.
- 松井 洋, 2001, 「日本の中学生の親子関係」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 12 巻, 第 1 号, pp.101-114.
- 松井 洋, 2002, 「日本の中学生の親子関係と非行的態度」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 13 巻, 第 1 号, pp.105-119.
- 松井 洋, 2003, 「親子関係と子どもの道徳性—日本, アメリカ, トルコの中高生の比較—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 14 巻, 第 1 号, pp.85-99.
- 松井 洋, 2004, 「社会的迷惑行為に関する研究」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 15 巻, 第 1 号, pp.55-68.
- 松井 洋, 中里至正, 中村 真, 堀内勝夫, 永房典之, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究(4) —社会的迷惑行為に対する恥意識と罪悪感—」, 『日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集』, 522.

- 松井 洋, 2004, 「少子化とバーチャルリアリティの時代の子どもの社会性」, 『児童心理』, 金子書房.
- 松井 洋, 中村 真, 堀内勝夫, 石井隆之, 2005, 「非行的態度の抑制要因に関する研究」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 16 巻, 第 1 号, pp.27-44.
- 松井 洋, 中里至正, 中村 真, 堀内勝夫, 永房典之, 鈴木公啓, 2005, 「恥意識と道徳意識の関係」, 『日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集』.
- 松井 洋, 中村 真, 堀内勝夫, 石井隆之, 2006, 「子ども」—比較文化研究からみた日本の子ども—, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 17 巻, 第 1 号, pp.51-70.
- 松井 洋, 中村 真, 堀内勝夫, 2007, 「恥意識に関する文化比較および世代間比較」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 18 巻, 第 1 号, pp.123-140.
- 松井 洋, 2007, 「親と子の双方から見た親子関係」, 『日本発達心理学会第 8 回大会発表論文集ラウンドテーブル』.
- 松井 洋, 2008, 「現代若者の価値観」丸山久美子編『21 世紀の心の処方学』, 第 3 部 17. アートアンドプレーン.
- 松井 洋, 六角絵里子, 中村 真, 堀内勝夫, 中里至正, 2008, 「恥意識と非行的態度に関する研究 (3) 非行及び社会的迷惑行為と恥意識との関係」『日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集』, pp.358-359.
- 永房典之, 中里至正, 松井 洋, 中村 真, 堀内勝夫, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究 (2) —非行的態度との関係—」, 『日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集』, 524.
- 中村 真, 中里至正, 松井 洋, 堀内勝夫, 永房典之, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究 (3) —親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響—」, 『日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集』, 520.
- 中村 真, 松井 洋, 堀内勝夫, 2007, 「子どもの意識・態度の形成因としての親子関係に関する研究」, 『日本パーソナリティ心理学会第 16 回大会発表論文集』, pp.84-85.
- 中村 真, 松井 洋, 堀内勝夫, 中里至正, 2008, 「恥意識と非行的態度に関する研究 (2) —親子関係と恥意識の形成」, 『日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集』, pp.356-357.
- 中里至正, 加藤義明, 杉山憲司, 松井 洋, 瀬尾直久, 1992, 「非行抑止要因の文化差に関する研究・日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として」, (財) 日工組調査研究財団.
- Nakasato, Y. & Matstui, H., 1993 Altruistic Attitudes of Japanese Youths. *International Journal of Psychology*, vol.27, p.562.
- Nakasato, Y. & Matstui, H., 1996 A Structure of Altruistic Attitudes -A Comparison of American, Chinese, Korean, Turkish and Japanese Youths-. *International Journal of Psychology*, vol.28, p.48.
- 中里至正, 松井 洋 (編著), 1997, 『異質な日本の若者たち』, プレーン出版.
- 中里至正, 松井 洋, 1999, 『日本の若者の弱点』, 毎日新聞社.
- 中里至正, 松井 洋, 2003, 『日本の親の弱点』, 毎日新聞社.
- 中里至正, 松井 洋, 2007, 「「心のブレーキ」としての恥意識—問題ある日本の若者たち」(共編著) プレーン出版.